



TITLE:

京大広報 No. 250

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 250. 京大広報 1983, 250: 341-346

ISSUE DATE:

1983-03-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209436>

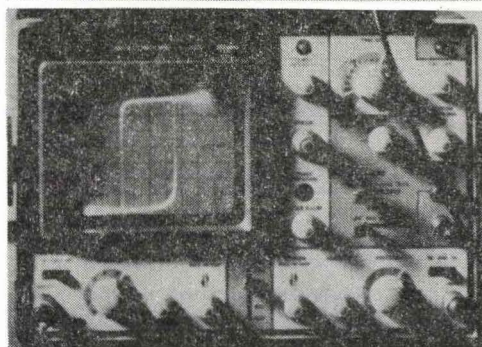
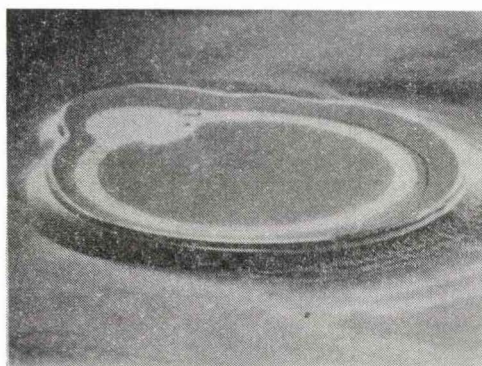
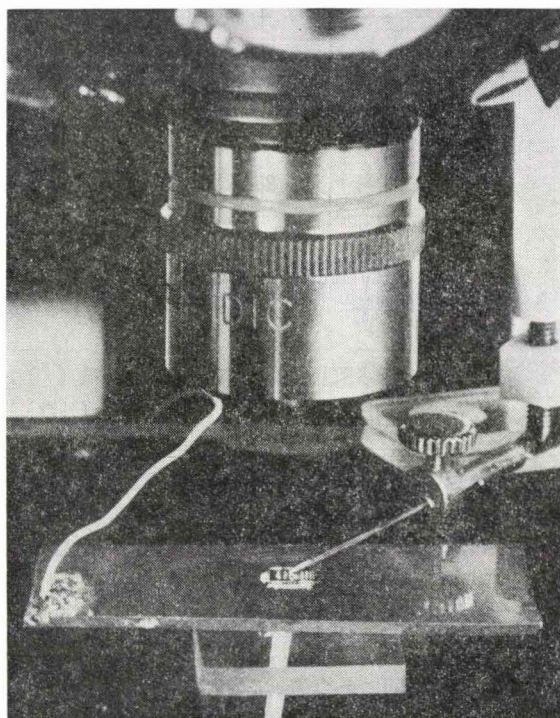
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 250

京都大学広報委員会



光の領域でトランジスタ機能を示す新半導体素子——関連記事本文343ページ——

（ 左：顕微鏡下でのテスト風景。下の白いファイバーから光を入れて，素子により増幅された光を対物レンズで集める
右上：直径 0.3 mm の素子本体の走査型電子顕微鏡写真
右下：素子で得られた光履歴特性で，光記憶に有効 ）

目 次

昭和58年度入学選抜学力試験 （第2次学力検査）の実施.....	342
昭和58年度医療技術短期大学部 入学試験の実施.....	342
学寮問題についての最近の経過.....	342

＜紹介＞ 工学部・電気系教室.....	343
＜随想＞ 入るを囚って出づるを制す 名誉教授 神崎 博愛.....	345
白浜海の家開設.....	346
日誌.....	346

＜大学の動き＞

昭和58年度入学者選抜学力試験
(第2次学力検査)の実施

昭和58年度第2次学力検査は、3月4日(金)、5日(土)の両日にわたり実施された。各学部別の受験状況は次表のとおりである。

なお、合格者の発表は、3月18日(金)の午後、学部ごとに行なわれる予定である。

学 部	募 集 員 数	志 願 者 数	受 験 者 数	欠 席 率
文 学 部	200	766	749	2.2%
教 育 学 部	50	91	91	0
法 学 部	350	852	839	1.5
経 済 学 部	200	801	784	2.1
理 学 部	281	988	967	2.1
医 学 部	120	322	306	5.0
薬 学 部	80	158	154	2.5
工 学 部	945	1,839	1,817	1.2
農 学 部	300	801	788	1.6
計	2,526	6,618	6,495	1.9

- (注) 1. 法学部および理工部の「志願者数」は、第1段階選抜合格者の数である。
2. 法学部の「志願者数」と「受験者数」は、外国学校出身者のための選考試験志願者46名を含んでいる。

昭和58年度医療技術短期大学部
入学試験の実施

医療技術短期大学部では、3月4日(金)と5日(土)の両日にわたって、昭和58年度の入学試験を京都女子大学において実施した。実施状況は次表のとおりである。

なお、合格者の発表は3月16日(水)の午後行なわれる予定である。

学科・専攻科	募 集 員 数	志 願 者 数	受 験 者 数	欠 席 率
看 護 学 科	80	132 (143)	111 (126)	15.9%
衛生技術学科	40	179 (82)	160 (68)	10.6
理学療法学科	20	166 (26)	134 (17)	19.3
作業療法学科	20	89 (98)	74 (74)	16.9
専攻科助産学 特 別 専 攻	20	49	35	28.6

(注) 「志願者数」と「受験者数」欄の下段()内は第二志望の志願者数及び受験者数(外数)を示す。

(医療技術短期大学部)

学寮問題についての最近の経過

学生部長 神 野 博

去る1月28日(金)、2月7日(月)及び同14日(月)の3回にわたり、学寮における費用負担の問題について、4寮(吉田・女子・熊野・室町)自治会との間で公開の話し合いを多数の教職員・学生の参加を得て行ないましたが、実りある話し合いとはならず、残念ながら同話し合いを打ち切らざるを得なくなりました。

このことに関し、学生部長の意向を伝えるため、下記の文書を4寮自治会委員長あて送付いたしました。

今後もし学生部長としては必要な限り寮生諸君と話し合いを行なうつもりです。しかし、今回の反省のうえに立って、今後話し合いをする場合には、4つの寮のそれぞれが固有の伝統と異なった事情にあることを考え、それぞれの寮ごとに少数の寮生と膝をつき合せて話し合うような努力をし

ていきたいと考えております。

以上、この間の経過について報告するとともに学寮問題につき一層の理解と協力をお願いいたします。

記

去る1月28日、2月7日および2月14日の3回にわたり私と寮自治会との間で、学生寄宿舎における費用負担（いわゆる負担区分）をテーマとして公開の話し合いを持ちました。

しかしながら、実りある話し合いにしようとした当初の意図は遺憾ながら実現し得ませんでした。

諸君は自己の立場のみ主張して議論を展開し、私に譲歩を強くせまりました。1月28日および2月7日に諸君の提示した文書に私が署名したのは、私と諸君との話し合いを成立させるために、忍び難きを忍んで行ったものでありました。

しかるに諸君は私の言葉には心を開こうとせず、2月14日の席上、話し合いの前提として私が繰り返し提示した事項（入寮届の提出・寄宿料の納入）についても何等応ずることなく、私としては、もはやこのような話し合いを継続することは不可能であると判断致しました。従って、同じ席上で明言した通り、この判断に基づき1月28日および2月7日に署名した文書はすべて撤回致します。

このたびの話し合いがこのような経過をたどったことは残念至極であり、私の本意とするところではありません。従って、このたびのような形での話し合いは今後行うべきではないと考えております。しかしながら、諸君との話し合いの意義を否定するものではなく、真に実りある話し合いの方法を改めて模索したいと考えております。

昭和58年2月21日

学生部長 神野 博

<紹介>

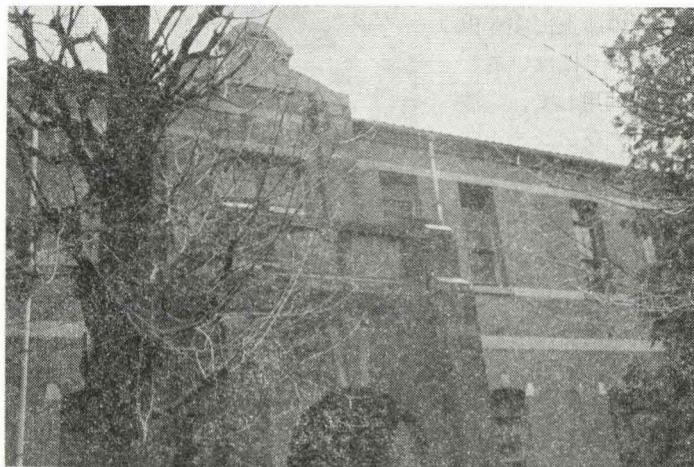
工学部・電気系教室

かつて、京大本部構内には赤色レンガの建物が立ち並んでいた。しかし、昭和30年代後半の大学拡張期に、当時の建築の風潮に沿い、工学部の建物は、コンクリート打ち放しの、白色地膚で統一され、この種の建物が急増し、赤レンガ造りの建物が激減した。ところが、正門を入り時計台を左に見て、北東の方向へ足を向けると、未だに往時の面影を偲ばせる一角に遭遇する。そこには、正面北側に土木工学科と、右手東側に電気工学科の赤レンガ造りの建物がある。更に、この赤レンガ造りの東側に、赤レンガと同色系統の化粧を施した電気系教室の新館が最近完成した。この新館は、電気工学科の一部建替え、昭和29年に日本の大学で初めて設置された電子工学科の新館、およびイオン工学実験施設の建物である。

玄関の両脇に高い銀杏の木2本を持つ電気系教室の赤レンガ造りの建物の1階部分は、明治33～35年に建

てられたもので、京都帝国大学創設後の最初の建物である。2階の部分は、大正10年に建増しされたものである。赤レンガの建物を注意して見ると、レンガの色および窓の形が1階と2階で異なることに気づく。このように、電気系教室の赤レンガの建物は、80有余年の大学の歴史とともに歩んできたもので、東大の建物が関東大震災で壊滅した今日、京大というよりも、日本の大学の歴史の上からも記念すべきものである。

建物を、古いが故に価値あるものとしてでな

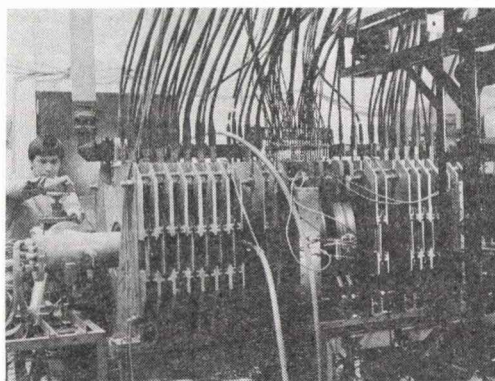


赤レンガ造りの電気系教室建物

く、建物から感じ取れる雰囲気を感じ取ることのないように、新築の電気系新館には、赤レンガと同色系統の化粧を施すことになったのである。本部構内のこの一隅に立って、創設時のキャンパスの雰囲気を少しでも感じ取っていただければ、甚だ幸いである。

他方、古い歴史的な建物を持つ電気系教室から新しい研究が数多く生み出されてきた。未来のエネルギー源として期待されている核融合を実現するためのヘリオトロン核融合、宇宙科学に関連した超高層電離層の研究、電子工学の中の新しい領域としてのイオン工学、更には医学との境界領域にあるメディカル・エレクトロニクス、バイオ・エレクトロニクス、進行波理論、非線形理論、自動翻訳機、光の領域でトランジスタ機能を示す半導体素子等、枚挙にいとまがない。

こうした新しい研究に関連して、電気系教室新館内の特殊用途の実験室を紹介する。新館の西南端には、イオン工学実験施設（本広報No.181参照）があり、これはイオンを基礎とした技術体系の確立のための実験を行なう施設である。ここには、イオンの加速電圧を5ボルトから400キロボルトまで連続的に変えて、イオンの性質およびその応用をあらゆる角度から検討できる世界に例を見ない装置がある。新館内部には、天井高8メートルで、床面積100平方メートルの高電圧実験室がある。ここでは、雷インパルス放電の現象、超々高圧送電技術の基礎研究を行なっている。新館の屋上の方を見ると、東南角の屋上に突き出したものが目にはいる。屋上を利用して、電波伝搬およびアンテナ関係の実験を行なうため、屋上に約17平方メートルの実験室が設けられている。更に、電子工学における微細な回路の研究は、塵埃の多い普通の部屋で行なっても、良好な結果をえることは期待でき



ミラー型プラズマ実験装置“HIEI（比叡）”

（高周波の回転電磁界を用いたプラズマのイオン加熱および不安定性の抑制の研究を行なっている）

ない。そのため3階には、クリーン度1万程度の無塵室を一室設置している。

いま、電気系教室の中庭に立ち、西側に赤レンガの建物、北側に白地膚の建物、東と南側に化粧レンガの建物を眺めると、大学変遷の歴史の流れに触れる感じがする。

今後、創設時の雰囲気を残しながら、電気系教室における新しい教育、研究を強力に推進して古い革袋に新しい酒を盛るべく、西側の古い赤レンガ造りの建物を改築していくことが急務である。
（工学部）



左下：赤レンガの電気系教室建物、左上：白地膚の電気系教室建物、右：化粧レンガのイオン工学実験施設と電気系教室新館

